

モンテ・ニュー 旅日記

関根秀雄 斎藤広信 ◆ 訳
白水社



旅日記

関根秀雄 斎藤広信 ◆ 訳



白水社

訳者略歴

関根秀雄(せきね ひでお)

一八九五年生、一九一九年東大卒

フランス文学・フランス語専攻

主要著書

『モンテーニュとその時代』

主要訳書

『モンテーニュ全集』

P・ミツシエル『永遠普遍の人モン

テーニュ』(共訳)

ブリリアリサヴァラン『美味礼賛』他

斎藤広信(さいとう ひろのぶ)

一九四三年生

一九六九年東北大学大学院修士課程終了

日本女子大教授

主要著書

『フランスの文学』

主要訳書

P・ミツシエル『永遠普遍の人モン

テーニュ』(共訳)

B・フランク『方忌みと方違え』

モンテーニュ旅日記

一九九二年一月二〇日印刷
一九九二年二月一〇日発行

訳者

©

関根 秀雄
斎藤 広信

発行者

藤原 一 晃

印刷者

山田 隆

発行所

株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部〇三(三三九)七八一一
編集部〇三(三三九)七八二一
振替東京九一三三二二八
郵便番号 一〇一

精興社印刷・松岳社製本

ISBN 4-560-04295-0

Printed in Japan

〔R〕〈日本複写権センター委託出版物〉

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

解説——旅日記

『随想録（エッセー）』の著者モンテーニュ（一五三三—一五九二）が残した旅の「日記」は、一七四年、すなわち著者の没後一八二年を経て、当時王室図書館の司書であったムーニエ・ド・ケルロ（Meunier de Querlon）によって始めてパリのル・ジュ書店から『旅日記』として刊行された。（表題は『*Journal du Voyage de Michel de Montaigne en Italie, par la Suisse et l'Allemagne en 1580 et 1581, avec des notes, par M. de Querlon*』となっている。）巻頭にはまず、かの『博物誌』で有名なビュッフォン（Buffon）に宛てた献呈の辞があり、次に読者のための緒言があつて、その中でケルロンは「日記」発見の顛末を語っている。それによると、ペリゴール州シャンスラッド（Chancelade）の教会参事会員のジョゼフ・プリュニス（Joseph Prunis）という人が、ペリゴールの歴史を書く目的で同州内をあちこち旅行している間に、（多分一七七〇年の）ある日、まだ火災にあつていない昔のままのモンテーニュ邸に來合せ、許可を得てそこに保存されていた古い櫃ひつの中を探ったところ、いろいろな反故類の間から、偶然この「日記」を発見したのだという。それは二つ折り判二七八頁の小冊で、その最初の幾枚かはその時すでに破れ失われていた。前半は秘書の筆跡であり、主人モンテーニュのことを三人称で語っているが、後半は正しくモンテーニュの自筆であつて、そのまた半分はイタリア語で書かれていた。プリュニスがこの思いがけない発見に狂喜し、モンテーニュの娘から六代目の

後裔に当たる時の主人セギュール伯 Comte de Ségur の許しを得て、原本の判読転写とその出版準備に、寝食を忘れて努力したことは想像するに難くない。

ところがどうしたのか、伯爵は原本そのものもブリュニスが骨折って転写した草稿も、一切取り上げてケルロンに渡してしまった。ケルロンの方は、イタリア語の部分については、その写しとフランス語訳の仕事を、バルトリー Bartoli という王立碑銘・文学アカデミーの外国人会員であったイタリア人学者に手伝ってもらうなどして、いつの間にか前記の書店から自分の名前で出版したのである。ブリュニスがいくら催促しても、原本借用の時にセギュール伯に渡した受取証も自ら骨折って判読転写したその草稿も、返して貰えなかった。その顛末は、彼が当時の雑誌 (*Journal des Beaux-Arts et des Sciences*) の編集者に宛てた手紙の中に憤慨して述べられている。だがこの件に関しては、必ずしもセギュール伯のみを咎めるべきではあるまい。それは始めに同伯とブリュニスとの間に明確な取り決めがなされていなかったからであって、伯が法的手段に訴えて原本を取り戻し、その整理編集を前記ケルロンに、出版に関する事務一切は、改めてこれを前記ル・ジェ書店に委託したのも、あるいは当然の処置であったかもしれない。

かくてル・ジェ書店は、一七七四年にそれぞれ体裁を異にする三種の版を相次いで刊行した上、なお同年中にイタリア語原文は省略してそのフランス語訳のみを載せた第四版を出し、さらに翌年には第五版を出した。これは、『旅日記』の公刊が当時の読書界からいかに待ち望まれていたかを示すものであろう。

『旅日記』の原本の方は、その後ケルロンの手によって王室図書館に納められたはずであるが、それは大革命以前から一度もそこに見出されなかった。ケルロン版には相当の誤読誤写が推測されるだ

けに、原本の紛失は今日もなお専門家の間で非常に惜しまれている。でも幸いにして、われわれは今日、大体信頼することのできるテキストとこれに関する貴重な注を持っている。最初の近代版は、一八八九年にイタリアの文学史家アレッサンドロ・ダンコーナ Alessandro d'Ancona によって出版された『十六世紀末のイタリア』という副題をもった版である。ここにはモンテーニュが出会ったイタリア人の身元調べがなされているし、イタリアの諸都市ないし諸地方、その他「日記」の簡略な叙述に暗示される背後の細かな事実などについても詳しい注が付けられている。ただこの版は、もともとイタリアの読者のために成されたのであるから、イタリア語で書かれた部分に対してはそのフランス語訳がなく、注もイタリア語である。第二は、一九〇六年にルイ・ローレー Louis Laurey がパリのアシェット書店から刊行した版である。この版の特徴は「日記」のテキストに照応する『随想録』中の記述を一々注の中に掲げて、ややおぼろげな著者の姿をいよいよ鮮明にすべく努めていることである。

それ以後に刊行された主な近代版としては、アルマンゴー Dr A. Armaingaud 版（一九二八—一九二九）¹、M. Rat 版（一九四二）²、ディエヤン Ch. Dédéyan 版（一九四六）³、前記ラとチボーデ A. Tribaudet によるプレイヤッド版（一九六二）⁴、ミシェル P. Michel 版（一九七四）などがある。最新版としては、イタリアのすぐれたモンテーニュ学者ガラヴィーニ F. Garavini による版（一九八三）がある。このガラヴィーニ版は、最近（一九八〇年）ムーロー F. Moureau が発見公表したレーデ写本（copie Leydet）⁵の写本は抜粋。レーデは前記ブリュニスの協力者であった人。）を参照利用しており、また「日記」の中に出てくるイタリア関係の人名地名や歴史的事項に関する従来の注の不備をかなり補っている。さらにイタリア語の部分とそのフランス語訳との対比検討を行なっている。

ロンのテキストの誤りや疑問点を指摘しているから、十分に信頼し得る版である。*

* その他、英訳本としてドナルド・フレイム Donald M. Frame による『モンテーニュ全集』（一九四八）、伊訳本としてチェント Alberto Cento による版（一九五八・一九七二）等がある。なお日本語訳としては、関根秀雄訳（白水社、一九四九）の他、串田孫一訳（白鳥書院・十字屋書店、一九四九）がある。

*

『随想録』初版がボルドーで刊行されたのは一五八〇年三、四月中のことであったが、モンテーニュは間もなくパリに向かって旅立った（六月二十二日）。国王アンリ三世にはすでに『随想録』が献上してあったので、国王はモンテーニュの顔をご覧になると、「そなたの本は予の気に入ったぞ」とお礼を言われた。モンテーニュはすかさず『陛下よ。「私の本が陛下の御意に召しましたからには、私めもまた御意になつたに相違ございませぬ。あの本は私の生活と行動の論説以外のものではございませぬから。』とお答えしたという。——これは当時の書誌学者ラ・クロワ・デュ・メーヌがその『ふらんす書解題』の中に記していることである（*La Croix du Maine, Bibliothèque française*, 1584）。——それから彼は七月二十四日、折からパリ北東にあるラ・フェール La Fère の城を囲んでいるマティニョン元帥 *maréchal de Matignon* の陣営にその姿を現わした。この都市には、前年来、神聖同盟派の挑戦に应じて、新教派のコンデ公 *prince de Condé* が立てこもっていた。その時モンテーニュは、一体どういう資格で、また何が目的で、ここに立ち現われたのであろうか。それはよくわかっていないが、とにかく八月二日には、モンテーニュと同郷の貴族で彼とは特別ゆかりの深かったフィリベール・ド・グラモン *Philibert de Grammont* が、砲弾炸裂のために片腕をもぎとられると

いう事件があった。(これは「家事録」八月六日の頁に記されている。)グラモンはそれから四日目にあえなく落命したので、モンテーニュがその遺骸を近くのソワッソン Soissons まで送っていったことは、『随想録』(三の四)に語られているとおりである。モンテーニュはそこから再びラ・フェールまで引き返したのだろうか、それともそのまま旅路に上がったのだろうか。ラ・フェールの城は九月十二日にマティニョン元帥の前に陥落したのであるが、モンテーニュはそれよりも前に、『旅日記』の最初の頁に記されているように、九月五日にはすでにバリ北隣のボーモン Beaumont まで来ている。すでに述べたとおり『旅日記』の最初の幾枚かが欠けているので、ラ・フェールからボーモンまでの間のことは今なお判明していない。

*

同じ理由からか、モンテーニュの同行者についても、それぞれの旅行目的や、ある者についてはその身分さえ、詳しいことはわかっていない。ただ段々と読み進むうちにおのずから判明してくるところに幾分の傍証を加えて、ここにあらかじめ簡単な説明をしておくことは便利であろう。——まず第一に挙げるべきは、マッドクロン殿、すなわち彼の末弟ベルトラン・シャル・ド・モンテーニュ Bertrand-Charles de Montaigne, sieur de Mattecoulon のことであろう。この人は一五六〇年の生まれであるから当時漸く二十歳になったかならないかである。父ピエールの六十四歳の時の子で、長男ミシェルとは二十七も歳がちがう。兄弟というよりは親子のようで、実際わが哲学者が日頃わが子のように可愛がっていた若者である。旅中常にモンテーニュと行動を共にしている。ことにおかしいのは、自ら腎石患者でもないのに兄と一緒に処所の鉱泉を飲み試していることである。だがいよいよモ

ンテーニュがローマを立つて帰国の途につくときは、剣術修業のために独りあとに残る。モンテーニュはこれに相当な金を与え、しかるべき下宿を選定してやっている。すこぶる元氣潑刺たる男で、兄と別れてから、生兵法をふりまわして牢にぶちこまれ、フランス大使のとりなしやおそらく兄の顔もあってどうやら釈放されたという話は、『随想録』（二の二七）の一五八八年の加筆の中に読まれるとおりである。——次はカザリス殿で、この人はモンテーニュの末の妹マリと結婚したが、ほどなく死別した義弟ベルナル・ド・カザリス（カザリ）Bernard de Cailis である。この人はバドヴァでモンテーニュの一行と別れ、そこにとどまって法律の勉強をすることになる。——第三に挙げられるのはシャルル・デスティサック Charles d'Estissac で、この人はモンテーニュが「父親の子供に対する愛情について」の章（『随想録』二の八）を献呈したあのマダム・デスティサックの息子であるから、歴とした大貴族の若殿である。一行中最も身分の高い人なので、公的な場合には、いつもこの人がモンテーニュよりも先にたたせられる。法王（教皇）の謁見の時なども、この若殿の方が先に《法王のおみ足に接吻する》。だが、どういう道筋をとるか、どの旅宿を選ぶか、というようなことになると、もちろん団長格であり年長者でもあるモンテーニュの方が万事決定する。この青年もまた、ローマで剣術修業をするのが目的であったのか、ベルトランと同様あとに残ることは、やがて「日記」本文に読まれるとおりである。なおこの若殿は、国王アンリ三世および王太后カトリーヌ・ド・メディシスからのフェラーラ公宛紹介状を懐にしている。——第四にデュ・オートワ殿 M. du Hautoy である。この人はロレーヌ地方の貴族で、前記デスティサックの家臣ではないかと推測される。「日記」で見ると、この人が一番格が低いように扱われている。主人側は以上の五名、いずれも道中は騎馬であった。乗馬はモンテーニュが最も好みまた得意とするところであったし、同行者はいずれも上記の

ごとく年若い殿ばらであつたから、皆はこの長旅を通じて、わずかの例外的場合を除いて常に馬でおしたのである。主人らしいのは大体以上の五名であつたが、それぞれ従者を従えていたし、それに騾馬曳きなどもついて行つたわけであるから、すべての人数は相当なものであつたろう。『随想録』の中に《恥ずかしいだけの人数を従えてゆく》にはなかなか金がかかつてそう度々はできない、とモンテニユ自ら洩らしているところなどから察しても、それが堂々たる一隊一団をなしていたであらうことは、想像するに難くない。また、当時の道中が、山賊なども出没して（「日記」の中にも、山賊のうわさを聞いて特に間道を選んで通つたことが記されている）、今日のように安全でなかつたことを考えると、このように十名を越す集団となつてゆくことは、必要なことでもあつたのだろうと推測される。

なおここに同行者の一人として特に忘れることのできないのは、この日記を半分近くまで丹念に記しつづけた、あのモンテニユの愛すべき忠僕もしくは秘書である。モンテニユはどうしてローマでこの男に暇をやつたのかわからないが、なかなか主人思いで、頭もよく、感心すべき男であつたことは、絶えず日記の行間にほの見える。どこかの都市に入るときは、いつも一足先に行つて、主人のためにあまり費用がかからないよう、しかも快適な泊まりが得られるよう、旅宿の亭主と万事よろしく交渉をする。始終主人の健康に気をつかい、食事のことはもちろん、こう新醸のお酒ばかり召し上がつては腎石尿砂がふえはしないかと心配したり、ナプキンがなくては御不快であろうとか、寝台に幕がなくては夜中お寒かろうとか、何くれとなく心をくばる。しかもほとんど毎日（時には数日間をまとめて）、おそらく主人の印象や意見を聞きながら、丹念に日記をつける。そこにはしばしばモンテニユならではのと思われる表現も出て来るし、またこの秘書の書いた部分とモンテニユ自らの筆

になる部分とが、文体の上であまり著しい相違がないことから、従来彼はモンテーニュの口授のままに書いたという説もないではない。だが、案外主人の方は、焼串の回転装置などを夢中で眺めていたりしてとりあわず、日記の方はもっぱらこの秘書が自ら一生懸命に秃筆を呵したのではなからうか。絶えず主人に付き従っていれば、知らず知らず主人の口癖が彼の筆について出て来てもおかしくはない。とにかく素朴なその文体の中に、旅先でのモンテーニュの行動や見聞、その印象や意見を書き記すだけではなく、遺憾なく主人の風格動静を点出し得ているその功は、大いに評価すべきであろう。（ガラヴィーニは、その『旅日記』の序論の中で、秘書の記述の自主性を強調している。）実際、モンテーニュはローマで、『こんなに立派に書きつづけてくれた男』と『こんなにまで書き進められている』日記に驚き感心している。生粋のペリゴール生まれと見え、異国で見る町々村々を、郷土のサント・フォワだのリブルヌだのにくらべたり、ときには郷土の味や寝台までなつかしんだりしている。

*

モンテーニュは生まれつき旅が好きであった。これまでも、国内では度々公私の旅をしている。特に一五七八年に腎臓結石の最初の発作に見舞われてからは、バルボタンやプレシャックの温泉にもっぱら湯治の旅をしている。だが、外国旅行はこんどが始めてである。彼はすでに老いかつ病んでいるのに、交通機関も発達していない当時、遠くローマまで出向いたのは、ただ単に彼の旅行好きのせいであつたらうか。モンテーニュの旅の動機として最も自然に考えつかれることは、当時のルネサンス人が誰しも心に抱いていた、ユマニストの故郷イタリアの空へのあこがれである。特に幼少の頃から書物を通して古代の人たちに親しんできたモンテーニュにとって、イタリアとりわけローマは確か

にあこがれの土地であったにちがいない。しかし、ときはすでに十六世紀も終わりに近づいていたし、モンテニウ自らもまたようやく円熟の心境に入ろうとする半白の老人であった。それに事実、彼の日記中には古代ローマへの憧憬の情は横溢しているが、イタリア・ルネサンスに関する記述は少なく、かえって多くの読者を失望させているくらいである。では、やはり、それは彼の持病のための療養の旅であったのだろうか。なるほど日記の中には、自己の病状の変化や各温泉の泉質やその特効に関する記載がすこぶる詳細をきわめている。それに、彼が抱いていた自然哲学から考えても、彼が一方に医術の無効をわらいながら、自然の良能はこれを信ずることがあつたのだとも、考えることができる。しかし、一五八二年に『随想録』(二の三七)に加筆したところによると、『わたしは旅のついでに、キリスト教国の有名な温泉場はほとんど皆見て来た。』と云っている。特に《旅のついでに》と云っているところを見ると、その旅には何か別に具体的な、もっと積極的な動機・理由があつたのではなからうか。それは何よりも、『旅日記』そのものの中に見出されるはずであらう。ところがすでに述べたとおり、『旅日記』は、その目的なり動機なりがもし書かれていたとすれば書いてあつたらうと思われる部分、すなわちその最初の幾枚かをすでに失っているのである。

彼は後年、『随想録』(三の九)において、『このまだ見ぬめずらしい物事にあこがれる心こそ、確かにわたしに旅行の望みをいだかせる一助となっているのだが、他にもいろいろな事情がまた相当にそれにあずかつてゐる。』と述べて、その旅にあこがれる理由を幾つか列挙している。彼は、家事管理の煩わしさをしばし忘れるがために旅をするのである。絶え間のない宗教戦争のために荒廃したフランスは、特に彼の郷土は、住みづらいからであるとも言ふ。いや、もっと単純に、彼はじっとしていられぬ性分で、馬の背で暮らすのが自分の性分に適っているからだとも言ふ。それから、処かわれ

ば品かわる諸国の人情風習をたずね歩くこともまた、モリストたるモンテーニュの心をいたく楽しませたことであろう。……だが、それらは、彼が旅を愛する一般的理由であって、こんどのスイス、ドイツからイタリアへの旅の理由を特に説明するものではない。(かつて、モンテーニュは国王アンリ三世あるいは王太后カトリーン・ド・メディシスから何か特別な政治的・外交的使命を託されてこの旅に出たのではないかとする、かなり大胆な推測がなされたことがあるが、それを裏付ける事実はまだ出ていない。)

モンテーニュがこの旅を企てた理由を幾つか考えてきたが、結局、そのいずれもが決定的な理由とはなり得ないように思われる。むしろ、それらの理由が重なりあつて旅に出る契機となつたのではあるまいか。——『随想録』を出版して一段落ついた今、一息つきたいところだ。末弟を始めとして、同行者となる若い者たちはしきりにイタリアに行きたがっている。自分としても、持病の治療のために外国の有名な温泉をいろいろ試してみたい。国内は宗教戦争に明け暮れているけれども、他の諸国の実状はどんなであろうか。幸い今は周辺の兵乱もどうやら小康を得ているし、家事の管理の方も自分がいなくても何とかやってゆけそうだ。この際、思い切つて書斎を離れ、旅に出るよい機会ではあるまいか。未知の国や土地を自らたずね、自分の目で確かめてみたい。新大陸までは無理だとしても、せめてあのローマの都までなら行けそうだ。ついでにロレートの聖堂に参詣して、女房や娘の幸福祈願のために献額をしてやることもできよう。あとは国王に、しばしのお暇を乞いさえすればよい。その際、お国のために役立つことがあれば、何なりと承ることにしよう。——旅に出る前のモンテーニュの心境を想像してみると、およそ以上のようなものではなかったらうか。

*

ところでモンテニユはまた、『隨想錄』の中で、つぎのようにも語っている。《わたしはわたしの旅の理由を問う者に向かって、通例こう答える。「何を避けてであるかはわかってゐるが、何を求めてであるかは自分にもわからない」と》(三の九)これは、一見とらえどころのない答のようであるが、旅に対するモンテニユの考えを端的に言い表わしているように思われる。旅に出たくなる理由を挙げれば、家事の管理が煩わしいとか、国内の政情になじめないとか、いろいろあるけれども、旅に何を求めるのか、何のために旅に出るのか、となると自分にも説明できない、と彼は言う。

だが、何か目的を抱えた旅、目的に拘束される旅は、果たして旅と言えるのだろうか。モンテニユの旅は、少なくともそうした旅ではなかった。《わたしの旅程はどこで区切ってもよい。それは大きな期待をもって立てられていない。その日その日が旅の終わりなのだ。わが人生の旅もまた同じようになされている》(三の九)旅それ自体が旅の目的であり、また人生の一部なのだ。我々の人生は不断に変化して止むことがない。そうした絶えざる変化を前にして、我々人間は不安を抱き動揺する。まして旅に出れば、毎日毎日が変化の連続であらう。しかし、そこにこそ旅の楽しみがある、とモンテニユは言う。《わたしはよく承知している。この旅行の楽しみは、文字どおりにとれば、不安と動揺との証拠であることを。しかしこの不安と動揺とは、いずれも我々人間の主要な、そして支配的な、特質なのだ。……ただ変化だけがわたしを満足させる。ほかに何一つわたしを満足させるものがない。多様性を捕捉することさえできれば、わたしは満足する。旅に出ると、「わたしはどこで足をとめても損はしないし、どこへそれで行っても楽しさに変わりはない」という考えが、わたしを

樂しませる。》(三の九) ここには、旅の理由・目的を超えて、モンテーニュの旅の思想がある。本日記においても、旅人モンテーニュは、これと同じようなことを秘書と同行の若者たちに向かって語っている。(本書八二―八三頁を参照)

*

『随想録』の方は、ただ近親朋友のために書いたのだと言い、序文の中で早くも公衆にさよならを告げてはいるものの、やはり自らこれを公刊しているのであるが、この『旅日記』に至っては、それこそ本当に、筆者が後世の人に読まれようとは毛頭思っていなかったものであることは、疑うべくもない。ここにかえて、この『旅日記』の意義もあれば価値もあるのではなからうか。例えばわれわれは、ここに『随想録』の著者のびちびちした文体を見ようとすれば失望する。『旅日記』の文章は、秘書が書いた部分も彼自ら筆を執った部分も著しい差異が感じられない程、素朴であり、ときには粗雑でさえある。またモラリストの風格を見出そうとして、ここに文学的・哲学的な省察を期待するならば、「味もそっけもない」《*sec et froid*》と評した百科全書派の人たちと同じく、失望を感じるだろう。なるほど「日記」には、モンテーニュが有名な学者や訪れた土地の要人と会談したり、ローマで法王に謁見した折の様子なども記されている。しかし主としてそこに読まれるのは、旅程のこと、**旅宿の設備、名所見物のしおり、旅中各種の物入り、病人の食餌箋、特に地方的にめずらしい献立、**訪れた温泉の泉質と特効、病状の変化に対する詳細な自己観察、工夫をこらした器械・装置、その他各土地で見聞する卑俗な瑣事の簡略な記述ばかりで、人間の内部生活や諸人物または諸国民の思想や感情に触れたものはほとんど見当らない。ただ、生来の飽くなき好奇心をもって、実によくいろいろ

なものを自分の目で観察し、確かめているのに驚かされる。サント・ブーヴ Sainte-Beuve が、「旅のモンテーニュはもっぱら見聞につとめていて、その間ほとんど反省批評をしていない。反省批評は後でするようにわざと取っておかれている」と言ったそのとおりである。

だがその代わりに、われわれはこの『旅日記』の中に、モンテーニュその人を実によく見ることができる。そこには最もうちくつろいだ、誰に遠慮も気兼ねもしない、ありのままのモンテーニュがある。その生来の愛すべき稚氣、つまらぬ虚栄がさらけ出されているところもある。いわばシャツ一枚のモンテーニュが、すなわち『随想録』の著者でもなければ哲学者でもない、むしろただの田舎貴族の、ただの大地主の、ミシユルのありのままの姿が、ここにしばしば見られるのである。しかもそれによって、『随想録』もその著者も一層よく理解されるのである。例えば、『随想録』の中ではモンテーニュは百姓や畑のことなど全くわからないような顔をしているが、実際よく手入れの行き届いたかどうか畑などを見ると心から感心している。また旅費のことばかりでなく一般物価のことなども詳細に記入しているところを見ると、『随想録』の中では自らをいかにも金銭に淡泊なように言っているが、案外金銭にこまかいことがわかる。モンテーニュはもともとブルジョワで、貴族趣味の人物であったし、『随想録』では革新は御免蒙ると言明しているし、ともすれば徹底した保守主義者のように考えられがちであるけれども、新旧両派の聖職者をたずねて話を聞いたたり、ミユルーズの自由とよき統治を見て喜んでいたりするところなどを見ると、彼が本質的には寛容を愛する民主主義者であったこともよくわかるし、彼の保守主義の限界もおのずから理解されるであろう。『随想録』では盛んに医者をこきおろしているのに、「日記」の中では今日の臨床医がするように綿密にまた正確に、いわば科学的に、自分の病状を観察記録し、それに省察をさえ加えているところを見ると、彼の医術ないし科

学に対する本当の感情や相当程度の信頼なども推測されよう。このように『旅日記』の簡略な記述を通して、『随想録』の著者だけではないモンテーニュの姿が遺憾なく見てとられるのである。

『旅日記』のもう一つの価値は、十六世紀後半のヨーロッパ諸国の都市の様子や人々の暮らしや風習など、いわば当時の生きた社会をじかに垣間見ることができることにある。例えば、スイスやドイツでは、暖房にシュミネ（壁暖炉）ではなくプワル（ストーヴ）を備えているとか、寝具には羽根布団を使用している、という記述がある。ルター派の教会で見たごく普通の結婚式の様子も記している。イタリアの都市で娼婦たちの許を訪れた時の印象記もある。ローマでは、法王のおみ足に接吻する儀式をはじめ、罪人カテナの処刑、悪魔祓い、ユダヤ人の割礼の儀、自ら鞭打つ苦行僧の行列など、いずれもその様子を詳細に記している。あるいは、フランスびいきの都市とか、フランス派とスペイン派とに二分されている都市とかの記述は、当時のヨーロッパの政治情勢の一端を伝えるものとして興味深い。また各地の温泉と湯治の様子は、特にわれわれ日本人には面白く読まれるであろう。

モンテーニュの飽くなき好奇心は、建築・彫刻あるいは変化に富んだ風景や工夫をこらした庭園など、あらゆる美しいものの見物に彼をかりたてている。ルネサンス以後のイタリアに旅しながらモンテーニュはルネサンス美術を空しく看過した、ラファエロやミケランジェロの名一つ挙げていない、と指摘する人もいるが（スタンダール *Stendhal*、シャトーブリアン *Chateaubriand*、等）、それは後世の、ロマン主義以降の人たちの批判であって、彼は当時の美術作品にも決して無関心であったわけではない。（彼はミケランジェロの名もその作品も挙げている。）今日ルネサンス美術に出てくる芸術家の名前こそ挙げていないが、すぐれた作品そのものに対する彼の関心は「日記」中に読まれるとおりである。